

## 創立70周年によせて

各務原市教育長 加藤 壽志



各務原市立那加中学校創立70周年を心からお祝い申し上げます。

那加町のシンボルである「歴史を物語る曲玉と境川の桜」をモチーフにした校章は、その図案を生徒より募集し、那加中学校開校の年に作成されたものと創立50周年記念誌を紐解き知りました。

開校当時の昭和22年は、戦後の混乱期の最中であり、教育基本法（旧法）や学校教育法が新たに公布され、6・3・3の学制が発足するという、戦前から戦後へと教育の考え方や価値観が大きく変化した年に当たります。

そのような社会が激動する学校創立期におきましても、「校章図案の生徒募集」を始めとし、「生徒会企画部員の職員会参観」、「生徒研究発表会の開催」、「生徒集会の実施」、「校内のど自慢音楽大会の実施」等、生徒の主体性を十分に尊重した様々な取組を積極的に実施した様子が、強く誌面より伝わってまいります。

また、教職員におきましても、当時の郡内自由研究発表会で意欲的に発表したり、昭和30年代後半には、教科や学校管理経営について岐阜県教育委員会の研究指定を受けたりし、県教育センターの研究協力校としての責務を果たしました。その後も岐阜県初の文部省の研究開発学校として10年先を見通した教育課程の開発等に積極的に取り組まれ、県内でも屈指の教育先進実践校であった誇りある歴史があります。

こうした、生徒と教職員が一丸となり、地域の支援を受けながら新しい学校づくりが推進された歴史を振り返る時、現在的那加中学校の教育目標「主体性」に込められた願いには、創立時から延々と貫かれ引き継がれてきた熱い考え方があり、また、それを支える教職員の弛まぬ研鑽という尊いあゆみがあることを強く感じます。現在の生徒や教職員の姿は、70年という教育実践の積み重ねの確かさであり、その歴史を伝統として脈々と引き継いできた賜物であると考えております。

創立70周年を機に、これからもその積み重ねを忘れることなく、これまで以上に生徒一人ひとりの心に寄り添い、また時代の要請に応えつつ、学校・保護者・地域のみなさまがしっかりと手を握り合い、心を通わせ合い、子どもたちの未来のために新たな歴史と伝統を積み重ねていただけるよう、心からお祈りいたしております。

## 創立70周年によせて

各務原市立那加中学校  
校長 村井 俊之



平成29年（2017年）、那加中学校は創立70周年を迎えました。この70年間で、卒業生は21,564人を数えます。卒業生は、日本各地はもとより、海外でも大活躍をしています。

那加中学校が創立したのは昭和22年（1947年）、太平洋戦争が終結し、新しい民主主義国家として我が国が動き出した中で、新しい教育制度がスタートした時に、新制中学校として那加中学校は産声をあげたのです。創立時は、現在的那加第一小学校に隣接した校舎でスタートしました。そして2年後に現在の土地に校舎が建設されています。

創立当初の学校の記録によりますと、満州から命からがら引き揚げてきたご家族、名古屋空襲で被災され親戚を頼って移住して来たご家族、三河地震で被災され移住をしてきたご家族等、様々なご苦労を背負いながら、お子さんを那加中学校へ通わせてくださった方々がいらっしゃいました。地域も各務原空襲での傷跡もたくさん残る中で必死に復興へとご尽力されていた時期でした。

そんな中で、新制中学校としての那加中学校は地域の文化の中心として明るい未来を作り出す使命をになっていたのだと思います。当時の学校日誌に次のような文面が残されています。「昭和二十三年六月七日 那加町有志の皆様より帳面五百冊寄贈さる。早速生徒に配布」これは、地域の皆様がなげなしの財を投げ打って、生徒のために勉強するノートを寄付していただいたのです。当時の様子を聞きますと、紙一枚でも貴重なもので、ノートなどなかなか手に入らないほど厳しい時期でした。また、「昭和二十四年十月 那加農業振興組合より、米十俵、麦五俵の寄付受ける。生徒の給食にて食す」とあります。まだまだ、食生活も十分ではない時代、身銭を切って学校にご尽力いただいた姿に脱帽です。

この様な状況でも、地域の皆様は、生徒へ夢を託し寄付をいただいたのだと思います。

あれから七十年、日本は世界でもまれに見る豊かで文化的な国として成長しました。多くの人々の努力の賜物の上に今の繁栄があります。これをベースにし、那加中学校は未来に向けて新たなスタートをきりたいと考えています。70年前の原点に振り返りさらなる努力をしなければならないと全校で気持ちを引き締めてまいります。

今後とも那加中学校へのより一層のご支援・ご協力をお願いいたします。